



国指定100周年

国教育総務課 ☎(235)4925

史跡相模国分寺跡

歴史公園として保存整備し、広く親しまれている史跡相模国分寺跡が国の史跡に指定されてこととして100周年を迎えます。この場所を次世代に残していくためには、私たち一人一人が郷土の歴史を知り、伝えていくことが大切です。史跡相模国分寺跡の解説とともに、これまでの発掘調査の成果、保存に尽力した人物などを紹介します。

国指定史跡になるまで

「史跡相模国分寺跡」は、8世紀中頃に創建された寺院の跡地として江戸時代の地誌「新編相模国風土記稿」に記載されるほど、古くから知られる遺跡です。今から1280年前の天平13(741)年、聖武天皇による「国分寺建立の詔」を受けて、全国60余国に国分寺と国分尼寺が建立されました。疫病の流行や農作物の凶作などで不安定な社会情勢の中、国

の安寧を仏教の力で祈ろうとしたものです。聖武天皇は詔で「建立場所は国華にふさわしい好所を選ぶこと」と命じ、相模国では海老名が選ばれました。運河である「逆川」を使い、瓦を三浦半島の窯から運ぶなど、相模国分寺の建立は国を挙げての大規模な事業だったことが分かっています。

9世紀に入り、激しい地震や火災に見舞われたことや政治体制の弱体化とともに、相模国分寺は徐々に衰退していきました。その後、海老名小学校東側に位置する高台に残っていたといわれる薬師堂が現在の相模国分寺の境内に移され、再興されたと伝えられます。

明治・大正時代の研究で塔・金堂・講堂などの礎石の並び方から奈良県の法隆寺と似た建物配置であることが分かり、大正10(1921)年3月に全国初の国指定史跡となりました。

僧房跡

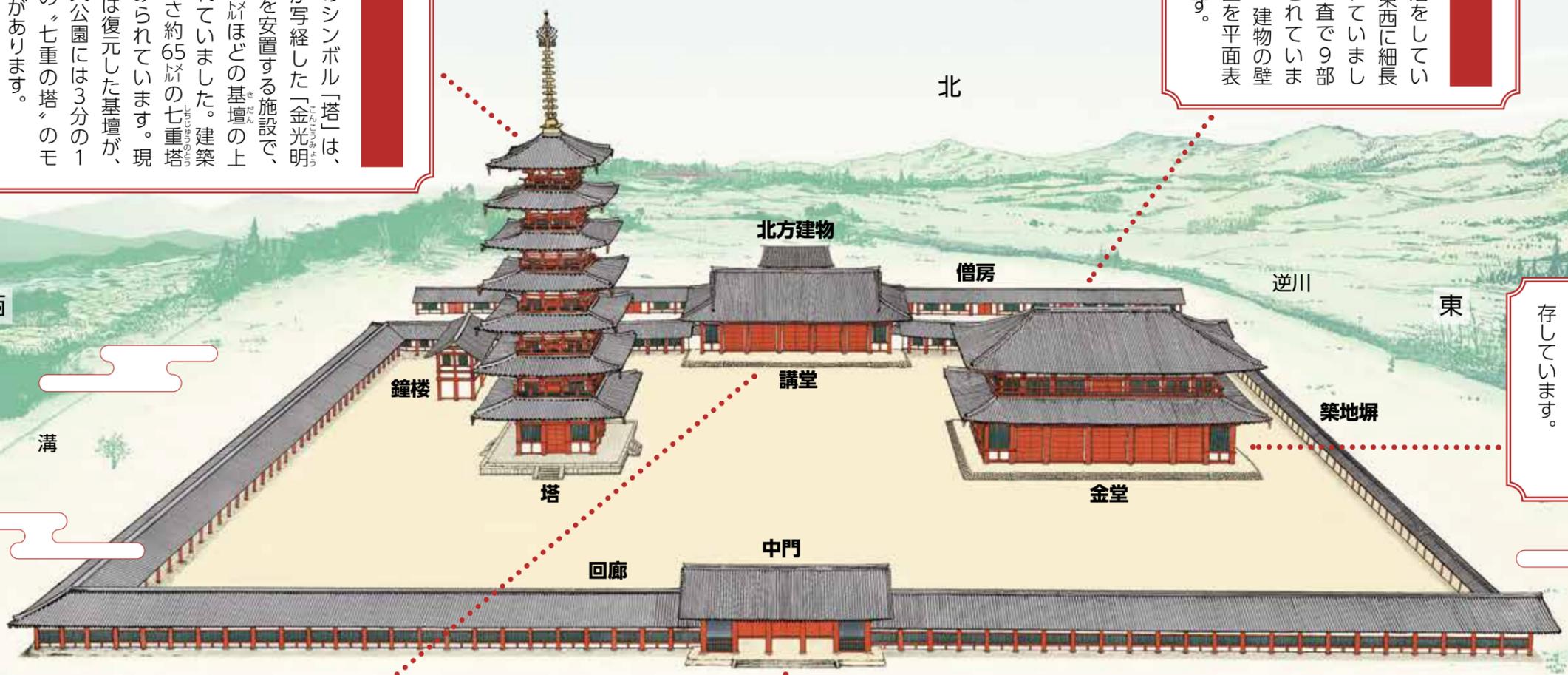
僧が生活していた建物で、東西に細長く建てられています。発掘調査で9部屋が確認されています。現在は、建物の壁と柱の位置を平面表示しています。

金堂跡

仏像が安置され、さまざまな儀式が行われた建物です。高さ約1mの基壇に16個の礎石が現存しています。

塔跡

国分寺のシンボル「塔」は、聖武天皇が写経した「金光明最勝王経」を安置する施設で、高さ1.3mほどの基壇の上に建てられていました。建築学的に、高さ約65mの七重塔だったとみられています。現在、塔跡には復元した基壇が、海老名中央公園には3分の1スケールの七重の塔のミニチュメントがあります。



東に金堂、西に塔、北に講堂の建物配置は奈良県の法隆寺と似ており、回廊と築地塀で周囲を囲んでいます。東西240m、南北300m以上と全国の国分寺跡の中でも有数の規模です。

中門・回廊跡

中門は塔や金堂がある敷地に入るための門です。発掘調査時の土の状態から大きさを推定しています。回廊は儀式などの時に僧が歩く廊下です。建物を囲むようにあり、礎石には柱があった痕跡が残っていました。

講堂跡

人々に仏教の教えを広めたり、僧が仏教の勉強をした建物。金堂とほぼ同じ大きさの基壇に、12個の礎石が現存しています。



史跡相模国分寺跡 ▲国分南1-19付近